

2. 東北の草地とその研究

伊藤 巖

北海道から東北に移って3年近くになる。事務局から原稿を依頼されて、現在北海道に対して自慢できるものがほとんどないことが残念である。それは現実の草地においても草地の研究においてもである。しかしながら、北海道が持つ高い草地研究の水準は、北海道のヒンターランドと無縁のものではない。すなわち、北海道の産業の中に占める草地農業のウエイトが東北よりはるかに大きい。このことが研究面に反映していることは否めない事実であろう。

東北地方も今後におけるわが国の食糧基地として目されているが、農業構造は北海道よりはるかに複雑であり、自然的・社会的・経済的条件により水稻や畑作、畜産等の多岐にわたる部門が零細な規模の中に入り組んでいる。北海道が持つエキゾチックな田園景観は農業をとりまく諸条件が内地より欧米型の草地農業を受け入れ易いということの証拠であるとみることができよう。すなわち、北海道においては、欧米型の草地農業をモデファイしてでも通用する面があるが、内地においてはすべてを創出し、ドメスティケートしてゆかなければならないのである。内地における数多くの公共草地にみられる技術的不安定性は直入技術に対する拒絶反応であるように考えられる。このため、研究面においても地味で地道なものとならざるを得ない。

周知のごとく、東北地方はかつてわが国における馬産の中心地であり、牧野に関しては古い歴史を持っている。しかしながら、現在北上山系などに展開しようとしている草地農業は、馬産時代の牧野経営とは異質なものである。それは、低開発地山系の開発という言葉で象徴される開墾事業や敗戦直後にテスト失敗済の開拓政策的農業であつてもならないだろう。省力化、近代化の名の下に、ところかまわず大型の機械を入れてゆく画一的な機械化農業であつてもならないだろう。東北の山地や傾斜地でなければ出来ないような新しい農業とはどんなものだろうか、ということを実際に考える必要があると思われる。

北海道時代は自分の専門分野においては、常に先頭を走っているという自負と誇りが心底にあった。オリンピックは参加することに意義があるかも知れないが、研究は先頭を走ることに意義がある。内地における草地研究のコースは北海道と若干違うような気がする。究極的には同じゴールを目指しているのだが大変困難なコースのように思われる。牛歩のような一歩でも先頭を進みたいと念願している。